

Title	シラス著 財政学第三版 Findly Shirras, Science of Public Finance Third Edition (1936)
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.8 (1937. 8) ,p.1185(85)- 1189(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19370801-0085
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370801-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シラス著「財政學」第三版

Findlay Shirras, Science of Public Finance. Third Edition (1936)

高木壽一

英國の學者は財政學一般に關する勞作を著はすことが比較的に少ない。最近十年間に英國に於ける財政學書にして特殊問題を論ずるものは多いが、財政學一般に關するものとしては、例へばピグー (Pigou, Study in Public Finance 1928) ダルトン (Dalton, Principles of Public Finance. 1929) 或はロビンソン (Robinson, Public Finance) を挙げ得るに過ぎない。其間に於ける獨逸及び、殊に最近に於ける米國の財政學書の簇出に比して著しい對照をなして居る。獨・米兩國に於ける財政研究の盛んなることは、世界戦争後及び世界恐慌後に生じた、それぞれの國に於ける現實の社會的必要の刺激に基くものと思はれる。英國に於ても財政の社會經濟的重要性は決して他國に多く劣らなすにも拘らず、財政學書の出現の乏しきことは奇異に感ぜられる所である。バステナル (Bastable, Public Finance. 1903) を權威とする英國財政學の主流を繼承するものは、シラスの「財政學」であらう。G. Findlay Shirras, The Science of Public Finance は一九二四年に第一版、續いて翌二五年第二版を出版されて居る。其後十年餘を隔て、一九三六年にその全部に亘つて改訂された第三版が出版された。第一版は約六百八十頁であつた

のが、新版に於ては上下二巻約千五百五十頁の浩瀚なる著作となり、現代財政學書のうちその量に於て最大規模のものに算へることが出来やう。それはまた英國財政學の典型的なるものと解釋して差支ないと思ふ。

シラスは第三版改訂について記して曰く、

「現存の英國書は財政理論——經費・收入・公債・財務行政——に關して生じた最近の進歩を含むで居ない。世界大戰以來の世界を通じて自由放任主義の消滅及び經濟的國民主義の普及は、それに續いて慎重なる研究を要する幾多の新なる問題を齎らした。其故に此著作を擴大したる形態に於て再び著はし、特に最近の思索の結果及び諸原理を現實の事情に適用したる結果に照して全部面を再検討することに決したのである。……」(財政學第三版序文)

英國財政學書に欠けて居る最近の財政現象の發展を取入れやうとしたと云ふシラスのこの新著は、いかなる特徴を持ち殊にその舊版と如何なる點に於て相異なるか。その全部を紹介することは出来ないが特に著しいと思はれる若干の點を例示する。

シラスは「財政學の研究者は自己の注意を自國の文献に局限することが出来ない。その主題の特殊部門に關する最良の勞作が屢々外國の學者によつて成されて居るからである」と云つて居る(第三版四二頁)然るにシラスのこの大著を通讀して感ずることは、近年の重要な財政問題について屢々英國書以外の外國書を考慮することを怠つて居ることである。英國書のほかに米國書が引用されるにすぎないことが多い。

殊に最近の財政理論の發展を考慮すると序文に述べて居るのに、例へば第二章に於て現代財政理論の新なる諸傾向について一言の觸れる所のないのは奇異である。

また經費理論に就て此新版に於てはビグーの移轉的經費・實質的或は消耗的經費の分類を引用して居るが、等しく

重要な經費分類として知られて居るドイツの學者コルムの貨幣給付と行政給付には言及して居らない。シラスの經費分類の理想的標準は依然として第一版に於ける如く Primary Function と Secondary Function に基づく分類である。

近年に於て最も發展したる經費理論は資本的經費の部門であると認め、資本的經費を妥當なりとする四の場合を擧げて居る。第一版に於ては三の場合を示して居た。(第一版九二頁、第三版一六二頁)新版に於て附加された第四の場合とは、非營利的公共土木事業及び、或場合に於ける政府及び地方公共團體の經濟的專業への参加であると云ふ。此問題に關する第三版一六七—一八六頁の敘述は、シラスの經費論に於て参照する價值ある部分であると思ふ。

シラスの財政學に於て特長をなす部分の一は、第十五章租稅負擔能力の問題である。租稅負擔能力を絶對的負擔能力と相對的負擔能力とに別つて論ずる。シラスはこの租稅負擔能力問題は財政學に於て重要なものと認め、例へばダルトンの如く租稅負擔能力なる字句を財政學の論議より除去するを可とすと云ふ見解には強く反對する。

シラスは租稅負擔能力を左右する條件として、財政學第一版(二三三頁)に於ては五項目を擧示したのであるが、此新版に於ては次の七項目を掲げて居る。即ち(1)其國家に於ける人口數(2)其國家に於ける富の分配(3)租稅徵收の方法(4)課稅の目的即ち其租稅收入金の用途(5)納稅者の心理の五項目に加ふるに、(6)所得の安定(7)インフレーションの二項目を掲げて居る。(二三四頁)

續いて絶對的租稅負擔能力と相對的能力とを英國及び印度の例を以て測定して居る。

此租稅負擔能力問題は今後日本の財政問題として取り上げらるべき重要問題の一であると思はれるが、このシラスの研究は必ず参照さるべきものと考へる。

租税轉嫁論に續いて、各種の租税の各國に於ける歴史及びその租税に關する一般原理の敘述は第一版に於けるものよりも尙ほ一層詳細となつて居る。この財政學第一版に存在せずして新版に於て始めて現れたものは第二十五章、取引税或は賣上税である。一九二四年に出版された本書第一版に於て賣上税に對して僅かに二頁を費されたにすぎないことは、寧ろ著者が此租税を餘りに過少評價したことを示すものと思ふ。此取引税を再發見したことが世界大戰後の財政政策の最も著明なる特徴の一であると述べて居るが、(新版第二卷六〇六頁)取引税論を加へたことはシラスの財政學書の欠點の一を補填したことになる。しかしながら、この取引税問題の取扱ひ方に於ても、他の租税の場合と等しく一通りの説明に終始して、突込むだ解釋が加へられて居ないことに甚しく不満足を感じざるを得ない。著書が序文に於て云ふ所の最近の財政の發展を取り入れやうとする趣旨から見ても、現代租税制度に於て極めて重要な地位を占めるに到つたこの租税の敘述が不充分であると思ふ。

租税負擔能力の問題と合せて特に参照するに値すると思はれるのは、第二十九章租税の負擔に關する部分である。(六八八―七〇七頁)

公債論に於て第一版には存在しなかつた政治的債務及び賠償問題の章が設けられて居る。賠償問題の歴史は財政學研究者にとつて四の點から見ても價値ある問題であると云ふ。(1)賠償金負擔、(2)賠償金支拂國の租税負擔能力測定の問題、(3)賠償金引渡の問題、(4)戰爭疲弊の後に於けるインフレーションの危険等についてである。

新版に於て新に加へられたる章として第四十一章「中央銀行」がある。中央銀行は現代財政に於て重大なる役割を有するのであるから、この「財政學」新版にこの新なる章を加へたことは極めて適切であると云へる。各國に於ける中央銀行の財務行政上の意義を論じて居る。この中央銀行の財政的役割については今後尙ほ問題は發展すべきものであると思ふ。

であると思ふ。

嘗てダルトン(Hugh Dalton)はボンベイ大學教授シラスの財政學に「バステブルに印度のカレーを調味したものである」との批評を加へた者があると云つて居る。シラスの財政學新版は、その舊版に比して種々の異色を有するものではあるが、尙ほバステブルに出づる英國財政學の正統に屬するものと云へるであらう。そしてバステブルの體系に従つて、このシラスの財政學の如く千百頁を越ゆる大作を著す英國の財政學者は再び現はれないであらうと思ふ。

其故に私はこのシラスの「財政學」第三版を以て英國正統財政學の最後のものと推定する。英國の財政學も亦、正に轉換すべき時にあるものと思ふ。